胸腺腫乗り越え公務復帰

洞爺湖町議会副議長・下道さん

がん啓発催し運営 検査で発見

【洞爺湖】町議会副議長の下道英明さん(54)が1月に受けた胸腺腫の手術を乗り越え、7日開会の3月会議から公務に本格的に復帰した。主催団体のスタッフを務める室蘭のがん啓発イベントで昨夏検査を受けたことが早期発見につながったことから、「一人でも多くの人の助けになるよう、これからも頑張りたい」と啓発活動への意欲を一層募らせている。（石井昇）

がん啓発のイベントで撮った写真を示し、「今後のライフワークにしたい」と誓う下道英明さん

下道さんは2011年から、がん患者への支援や理解を訴える米国発祥のイベントで室蘭では08年から毎年開かれている「リレー・フォー・ライフ」の運営にかかわるようになった。友人の妻ががんにかったのが、きっかけだった。総合司会を務めた昨年8月のイベントは通常より低料金で肺がん検診が受けられるコーナーがあり、受診者を増やす呼び水にしようと自ら受けてみることにした。

1カ月後、郵送された結果を見て下道さんはショックを受けた。肺と肺の間の前縦隔という場所に「影がある」という内容だった。製鉄記念室蘭病院で精密検査を受けたところ、前縦隔に胸腺腫が見つかったのに加え、肺にがんらしき病変があることが分かった。肺の治療を優先し、11月に胸に小さな穴をあけて行う胸腔鏡手術で右肺の一部を切除。幸いがんではなく、感染症の非結核性抗酸菌症と診断された。

一方の胸腺腫は、幼児期から小児期にかけ免疫をつかさどる胸腺にできる腫瘍。生体検査でがんでないことが分かっていたが、下道さんの場合、重症筋無力症という難病を発症する恐れがあったため摘出が必要とされた。1月に入院。胸骨を開く3時間半の手術の末、無事に患部を取り出した。周りの組織に広がる浸潤もなかった。

執刀した同病院呼吸器外科の長谷龍之介科長によると、胸腺腫は増殖のスピードは遅いものの、進行すると周囲の肺や心臓に広がる恐れがあり、「早期発見が重要だ」と強調する。手術前後にリレー・フォー・ライフの他のスタッフから励ましを受けたという下道さんは「イベントにかかわっていなかったら、気持ちの余裕がなく、内にこもっていたかもしれない」と振り返る。

手術から2カ月近くたった現在も胸に水がたまった状態で7日の本会議も背広の下に胸を保護する装具を付けて出席したが、少しずつ良くなっていることを感じる。「5年間、がん啓発に取り組んできたことは結局、自分のためでもあった。今度こそ周りの人の役に立ちたい」と力を込めた。

北海道新聞朝刊2016年3月8日（火）